

## 上海く香港く台北（完）

### 本省人・外省人と故宮博物院・烏龍茶

香港は英国の植民地だったのに対して台湾は日本の植民地だった。その後、毛沢東との国共内戦で大陸から逃れてきた国民党の蒋介石が国民党政権を樹立し総統に就任。以来、「二つの中国」はないと主張する中国政府と対立。蒋介石は一九七五年に死去。その長男の蒋経国が総統の地位を継承。その蒋経国も死去し、同総統に認められ副総統の地位にあった李登輝氏が一九八八年に台湾人出身の最初の総統に就任したけれど、この対立は一貫して続いている。台湾海峡を挟んで対峙する緊張が続いている。その背景には、過去の経緯は別にして、中国の強大化を限定しようという米国の世界戦略とアジアNICS（新興工業国）の一員として大陸よりも台湾が遙かに経済的に豊かになっているという事情もある。

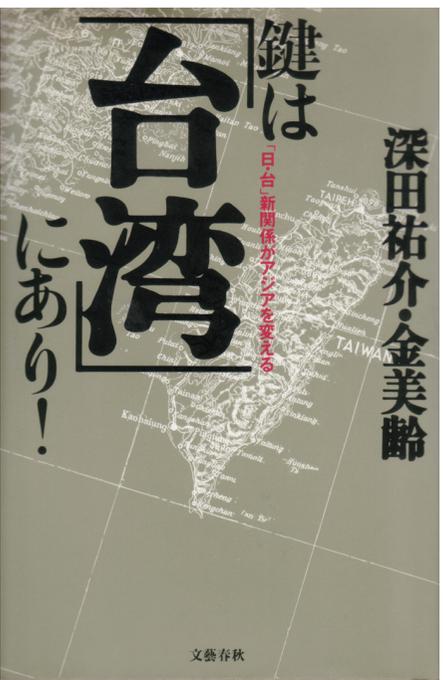
なお、李登輝総統は、日本統治下時代、京都大学に入学。その後、米国のアイオワ州立大学に留学、コーネル大学で博士号を取得。帰国後、台湾大学で教鞭をとりつつ農村改革に貢献した手腕を認められて台北市長、台湾省主席、副総統、そして総統へと上り詰めた人物である。



## 台湾の四百年は外来政権の歴史

僕が台湾と言われてまず思い浮かべることとは、その産業とか地形とかを別にすれば、だいたい、この程度の認識だった。また台湾には「高砂族」<sup>たかさごぞく</sup>、今は一般には「高山族」と呼ばれる先住民がおり、そこに大陸から漢民族が移り住み、今では漢民族がほとんどを占めるようになっていたことも知識として持っていた。

だが、今回、初めて台湾に行く機会が得られたものだから、斜め読みしかしていなかった深田祐介・金美齡共著「鍵は台湾にあり」<sup>ふかだゆうすけ きんびれい</sup>（文藝春秋 一九九六年）を改めて読み直した。これには、概略、次のようなことが書かれていた。



台湾はもともと「高山族」と呼ばれるポリネシア系の先住民が住んでいた島だったが、十六世紀ごろから漢人系の移住民が少しずつ大陸からやってきた。台湾が世界史に登場したのは、オランダの艦隊が上陸し、現在の台南市内に城を築き植

民地経営に乗り出した一六二四年のことだ。数年遅れてスペインが台湾北部を占拠し、そこで植民地経営に乗り出した。

オランダもスペインも大陸からの漢人移住民の渡航を奨励し、彼らに経済作物を栽培させると同時に、対日本・中国貿易の中継基地として利用し、大きな利益を得た。その後、オランダはスペインを台湾から追い出したが、一六六二年、このオランダも台湾から追い出された。追い出したのは、大陸で満州族に滅ばされ、兵を連れて台湾に逃れてきた明朝の遺臣たちだった。だが、その王朝も約二十年後の一六八三年、満州族が大陸に作った清王朝によって亡ぼされる。以後、清王朝は約二百年あまり台湾に大陸から定期的に官吏や軍隊を派遣し、旧来の土着の民衆を統治するという典型的な植民地支配を続けた。

この清王朝に代わって台湾を支配したのが日清戦争に勝って清王朝から台湾の割譲を受けた日本だった。一八九五年のことだ。日本は台北に台湾総督府を設置し、台

湾統治を始めた。この状況が第二次世界大戦で日本が敗戦するまで約五十年続いた。代わって乗り込んできたのが蒋介石率いる国民党軍だった。占領の先遣隊として約一万人の軍隊が台湾に乗り込んできた。ところが、この国民党軍がひどかった。無理無体の限りを尽くした。「祖国の懐に抱かれ」「同胞を熱烈に歓迎」するつもりだったのに、中国四千年来のもろもろの悪徳が手をつないでどつと台湾に押しかけた感じで、それまで曲がりなりにも近代的社会への道を歩みつつあった台湾は、一気に混沌なかに突き落とされた。

一九四五年十月二十五日、日本軍の受降式が台北で行われ、これにより「台湾人」は本人の意思とは関係なく、強制的に日本から中華民国への国籍変更が行われた。この日が現在、「台湾光復節」となっているが、同時に、日本国籍から中華民国国籍に変更になった従来の台湾人を「本省人」、そして戦後、大陸から台湾に渡ってきた国民党の中国人を「外省人」と呼び、国内で対立する歴史を生み出した。

この抗争は熾烈しれつをきわめた。外省人に対して本省人は全面的な反抗運動が起こした。それが一気に爆発はつぱつしたのが、「二・二八事件」だった。外国製タバコ売りを取り締め、タバコを没収することを小遣い稼ぎとしていた官吏と警官が、それまでも事件を繰り返していたが、前日も抗議する群衆の一人を射殺したことから一九四七年二月二十八日、デモ隊が国民党の本部（旧台湾総督府）に押しかけた。それに対して機銃が掃射され、死者三人、負傷者多数の惨事となった。

これをきっかけに本省人の抗議行動は台湾全土に拡大し、各都市で市役所や警察署を攻撃し、これらを占拠した。三月一日、本省人は外省人に改革要求を出し、両者の間で交渉が行われることになった。ところが三月八日、大陸からの国民党の援軍が到着すると、武力で本省人を弾圧し、約二週間で台湾全土を制圧した。交渉のテーブルに付いていた本省人の代表は、ほぼ全員が逮捕され、虐殺された。知日派のエリートはほとんど抹殺された。犠牲者は約三万人に達した。当時の本省人の二百人に一人が犠牲になった。以後、本省人と外省人との対立は決定的なものとなった。

それが延々とくすぶってきたのだが、台湾人、つまり本省人である李登輝総統が誕生したのも台湾の人口の圧倒的多数を占める本省人の意向をまはや無視することが出来なくなったからだ。

外国人は台湾問題について、中国と台湾は、ともに漢民族であるを一括りにして考えているようだが、これは大きな間違いだ。同じ種族に属する人々が別々に複数の国家を形成している例はいくらもある。同じアングロサクソンの流れを汲むからアメリカもカナダもオーストリアもニュージーランドも、全部イギリスだと言うのと同じくらい滑稽なことだ。

しかも何十年間も分離された状況の民族を無理に一緒にすることの大変さは東西ドイツの例が示している。台湾と中国とが統一された場合、二千万人の台湾人が十二億人の中国人を経済的に背負い込むことになる。まるでブラックホールに飲み込まれるようなものだ。

## 上海・香港とは別世界だった

外省人と本省人との間で確執かくしつがあるといったことは、友人の陳さんからも聞いたことがあったけれど、その背景まではよく分からなかった。書かれていたことの真偽を確認する術すべはないけれど、もし、これが事実だとすると、本当に中国と台湾との関係には難しいものがあると、少し暗澹あんたんたる気持ちに襲あわれていた。

しかし、実際に香港からキャセイ・パシフィック航空に乗ったらアツと言う間に台北に着いてしまい、遼しゅう巡じゆんする余裕などなかった。キャセイ・パシフィック航空は香港を拠点に全世界にネットワークを持っているエアラインで、ちょうど香港返還を記念した新塗装の「スピリット・オブ・ホンコン」と銘打った機体が飛び交っていた。機内でも、その記念ミニチュアを販売していた。それに僕らも乗ったもので運が良いなどと喜んでいたら、もう着陸だった。

空港の雰囲気は上海や香港とはまるで違っていった。むせかえるような熱気に馴なれてきていたので、整然せいぜんというか閑散かんさんとしているようで拍子抜けしてしまった。空港から市内までの高速道路も空すいいていた。幅広く、直線部分が多く、そのまま戦闘機などの滑走路に使えるように意図して作られたのではないかと思った。



市内に入っても、これまで嫌というくらい浴びせかけられてきた熱気は感じられなかった。東京よりも寂しいくらいだった。アジアNICSの一員として半導体やパソコンなどの生産で躍進を続けているというイメージからはほど遠いものだった。ホテルに入っても、このイメージは変わらなかった。同じ漢民族といってもまったく文化が違うと思った。

使われている漢字も「簡体字」ではなく、基本的に「正統派」ともいうべきものだった。たとえば「学」ではなく「學」だし、「鉄」ではなく「鐵」といった具合である。日本で言えば、戦前に使われていたような字体である。そうした漢字で書かれた華やかな看板などが溢れていた。親しみというか郷愁きょうしゅうというようなものを感じた。同時に、予想外に人通りが少ない街を見て、アジアの「新興国」というよりはアジアの「老国」のように思えてきた。

この感覚は台北からちよつと離れたところにある工場に行ったときにも持った。途中の風景を眺めていてもそうだし、工場に入ってもそうだった。さらに友人のAさんの勧めで会った台湾有数の大手企業グループの若手経営者と話して、やっぱりそうだったかと思った。

まだ四〇歳そこそこのエリート中のエリートだけれど、Aさんの説明の通り、僕らの世代の者が言う好人物であると同時に、米国の大学を卒業し、流暢りゅうちやうな英語を喋る、やり手という面も持つ人だった。香港に出かける前の時間を割いてもらい、二時間ほどホテルのロビーで話した。彼の関心は、すでに完全に大陸にあり、香港そして深圳しんせんでのビジネス展開に奔走していた。台湾ではもう人件費も高いし、ビジネスにはならない、これからは大陸だと言い切り、週の半分は香港を拠点に活動しているという。彼が外省人なのか本省人なのか知らないけれど、少なくとも前述の「鍵は台湾にあり」に書かれていたような大陸との関係にこだわっている様子は微塵も感じさせなかった。若い世代の台湾のエリートたちは、そんなことにあまり頓着とんちやくしていないようだった。

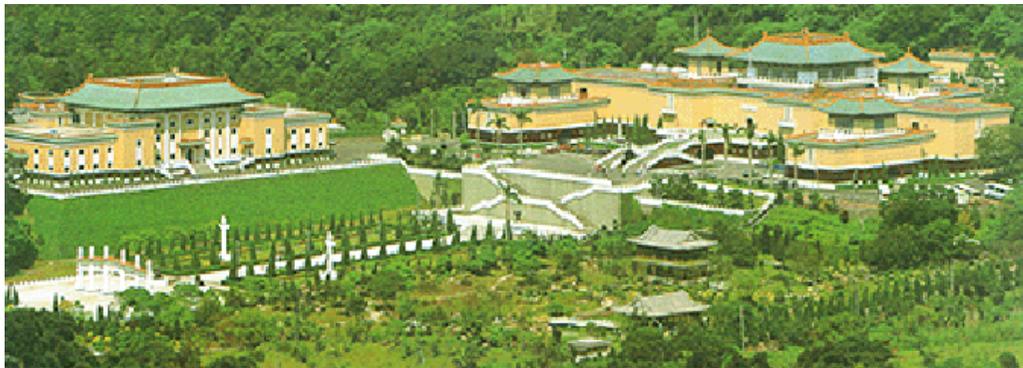
いずれにしても、これまで僕が持っていた台湾のイメージは幻想だったように思えてきた。台湾の将来の姿も分かるような気がした。すでに台湾の企業は中国に生産委託を始めていたけれど、この勢いは今後ますます強くなるだろうという確信を深めた。

## 故宮博物院は圧巻だった

友人の作家、杉田望は僕が台湾に行くと言ったら、それなら是非とも機会を作って故宮博物院に行くべきだと勧めた。蒋介石が台湾に逃げ込む際に北京の故宮（紫禁城）から持ち出した膨大な美術品などを見ることがができる。北京の故宮は建物は立派だけれど、中身はほとんどもぬけの殻のようなものだ。北京に行つて紫禁城を訪れると分かる。だから、まず台湾の故宮博物院を見てきた方が良いなどと言われた。

それで時間が出来たときに、寅さんを誘つて故宮博物院に行った。五千年来の中国歴代の王朝から代々受け継がれてきた国宝級の品で、北京の故宮博物院に所蔵されていたが、一九四九年戦火から守るため台湾へ運ばれ、台中の霧峰に保存された。その後一九六五年、故宮博物院の開館に伴い移転されて現在に至る。パリのルーブル、レンブラットのエルミタージュ、ニューヨークのメトロポリタンとともに世界四大博物館の一つに数えられるといった説明には、やや身勝手なものを覚えたけれど、たしかに凄かった。

建物そのものは映画や写真で見たことのある北京の紫禁城とは似ても似つかない平凡なものだった。だが、収蔵されている銅器、陶磁器、玉器、書画、文具、象牙、



竹器、彫刻、漆器、織物、書籍、経典などは、いずれも見応えがあった。全部で約七十万点あるという。その一部しか見ることはできなかったけれど、十分だった。

年代順に並べられた、これらの品々は圧倒的な迫力で中国五千年の歴史の重さと凄さを語っていた。それを肌身で感じた。七世紀初頭に派遣された遣隋使<sup>けんずいし</sup>、そして七世紀から九世紀にかけて派遣された遣唐使<sup>けんとうし</sup>たちが小さな帆船で命がけで渡航した理由や、彼らが目的地に達して受けた驚きなどが理屈抜きで分かった。



僕には説明する能力はないし、専門家の人たちに詳細に解説してもらったとしても、それを理解するのにどれだけの時間が掛かることだろうか。想像を絶するものがあつた。陶磁器一つをとつても、これまで日本で見聞きしてきたことが、いかに些細<sup>ちせ</sup>なことであつたか思い知らされた。日本でいう「侘<sup>わ</sup>び」とか「寂<sup>さび</sup>」とかに通じるものはもちろんのこと、きわめて先鋭的なものまでが、すべて揃<sup>そろ</sup>つていた。それも数百年前のことだ。

書画や陶磁器や骨董品に目のない寅さんも持病の痛風の足を引きずりながら夢中になつて見ていた。僕も体調を忘れて歩き回つていた。気が付くと、夕暮れが迫りつつあつた。時間の少ないのを嘆きつつ、故宮博物院<sup>こきゆう</sup>を後にした。

## 凍頂烏龍茶と再挑戦の上海蟹

気持ちの切り替えは二人とも早い。明日は帰国だし、せっかく来たのだから美味しいと言われている中華料理を食べ、土産も買おうということになった。僕は土産は

初めから決めていた。「凍頂烏龍茶」だ。友人の作家、杉田望のところで「白毫銀針」を飲ませてもらって以来、すっかり中国茶にはまり込んでいた。そして台湾にも「凍頂烏龍茶」という絶品の烏龍茶があることを知った。

「大陸の烏龍茶より発酵が弱いため清新の香りを持つ。今から一四〇年前、福建省から移植された苗木が凍頂烏龍茶の始まりで、台湾の代表的な烏龍茶。濃厚な味と、甘く、あるいは、清々しい香り。これはお茶そのものの、味と香りを楽しみたい時のお茶」という通販誌のグルメ欄の説明を読み、思わず買い求めてしまった。決してまずいモノではなかったけれど、もの足りなかった。もつと美味しいものがあるのではと思った。それで台湾に行く機会があつたら、自分の足で最高級の「凍頂烏龍茶」を探すと決めていたからだ。

ホテルに戻り、地図を貰いながら、店の情報を仕入れて街に繰り出した。いろいろな店があつたけれど、立ち止まるのは、もっぱらお茶や判子や骨董品などの店だ。寅さんと歩いていると自然とそうなってしまう。盛んに日本語で呼びかけられる。それも上手い日本語だ。上海や香港とは明らかに違う雰囲気だった。

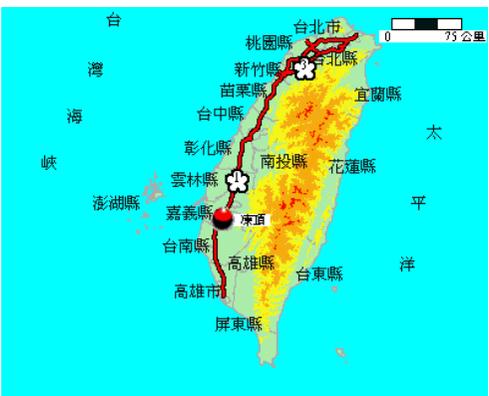
なかでも「美味しいカラスミがあるよ。絶対に美味くて安いよ」という呼びかけは魅惑的だった。その声に惹かれて卸問屋のような店に入った。いろいろな種類のカラスミがたくさんあつた。日本語でオヤジがいろいろ説明する。しかし、品物を見ると、どうしても食欲をそそるようなものではなかった。試食もさせてくれない。で、結局、買うのは止めることにした。止めると言ったら、途端に、またいろいろ言ってきた。試食もさせるようなことを言ってきたけれど、食べでもしようものなら、もう断れない雰囲気だったので無視して外に出た。

それでもお茶だけは大きな専門店で試飲を繰り返し、完全に納得できるものではなかったけれど、何種類か買ってしまった。いろいろ飲んだもので、済まない気持ちになつたからだ。



ちなみに説明書によれば、「凍頂烏龍茶」とは、台南懸の海拔約八〇〇メートルの凍頂山の山麓を埋め尽くす茶畑から生産される烏龍茶の総称。その名前から受けるイメージとは異なり、気候は亜熱帯性。一年を通して温暖で、夕方になるとよく雨が降る。この地域の茶生産の歴史は一五〇年以上前に遡る。科挙試験のため福建省に渡った学生が帰郷の際に茶苗を持ち帰り、植えたことに端を発するという。

もつとも今や凍頂山を起点に半径五〇キロメートルぐらの地域で生産される烏龍茶すべてに凍頂烏龍茶という名前が付けられているようで、なかなか本当に良いモノを手に入れるのは値段もさることながら、至難の技らしい。やはり、誰かのツテをたどるか先達に頼むしかなさそうである。



凍頂烏龍茶ばかりではない。中華料理も再挑戦した上海蟹もそうだった。美味しい店だと言われて出かけた。しかし、上海で美味しいのを食べてしまった僕たちには値段は高かったし、味にも不満が残った。台北から帰国の途に着いたけれど、このままでは済まされな**せん**と思った。先達を頼み、再度、訪れたいと思った。

一九九七年秋 伴 友貴

台湾の地図は、[http://plazat3.mbn.or.jp/~taiwan\\_boy/map.htm](http://plazat3.mbn.or.jp/~taiwan_boy/map.htm)、<http://www.jds.com/>  
航空機の写真は、<http://www.airliners.net/>  
故宮博物院に関する写真は、[http://www.npm.gov.tw/japan/index\\_j.htm](http://www.npm.gov.tw/japan/index_j.htm)  
凍頂烏龍茶の栽培の写真は、<http://formosa-tea.cha.to/v-ton.htm>  
に掲載されていたものを使わせて頂いた。